二			_	は	第一章	第 I 部			三			<u>-</u>	_	序
(1) 開催の経緯 - 51 - 一八六七年パリ万国博覧会の開催と日本の参加	(2) 日本と万国博覧会 47	(1) 産業博覧会から万国博覧会へ 36	パリ万国博覧会のあゆみ	はじめに	章 「物」による日本イメージの形成	¶部 一八六七年パリ万国博覧会 29	(2) 分析方法——先行研究との関連で—— 14	(1) ジャポニスム研究における位置 13	本書の特徴13	(2) ジャポニスムの到来 12	(1) 「日本」との出会い 9	一八六七年・一八七八年のパリ万国博覧会と「日本」	開催国、参加国、観衆6	章3

(2) 産業芸術の振興 54

(1) 薩摩藩のパリ万国博覧会への参加経緯――モンブランとの出会い―― 12二 パリ万国博覧会における幕府外交の失敗――薩摩藩とモンブラン――・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	(4) パリ到着――全権公使向山一履の要請によるシーボルトの随行継続―― 18	(3) 横浜からパリへ――フランスとイギリスに対する幕府使節の対応の相違―― 14	(2) シーボルトが幕府使節に随行した経緯 111	(1) 一八六七年パリ万国博覧会への徳川昭武の派遣 109	一 幕府使節をめぐる英仏の対抗10	はじめに	第二章 外交の場としての万国博覧会——「日本」の揺らぎ——		おわりに	(3) フランス・ジャーナリズムの反応 78	(2) 国際審査委員会の公式評価 72	(1) 日本の展示 68	三 博覧会場における「日本」	(4) 日本の出品物 63	(3) 日本の参加の経緯 57
---	---	---	---------------------------	-------------------------------	-------------------	------	-------------------------------	--	------	------------------------	---------------------	--------------	----------------	---------------	-----------------

(2) モンブランと日本

125

(3) モンブランの見解が転換した背景

	(5) フランス社会に露呈された「日本」の揺らぎ 151(4) パリ万国博覧会における薩摩藩・フランス・幕府の討議	の 討議 138
三	三 フランス外務省の態度――昭武の傅役ヴィレットの報告か	百から――・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	(1) ヴィレットの経歴と傅役就任 15	
	(2) ヴィレットの報告書――監視役としての任務――	156
おわ	おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	163
第Ⅱ	≅ 一八七八年パリ万国博覧会 88	
第三章	すれちがう万国博覧会への期待――ジャポ	ゲニスム誕生の背景で――
は	はじめに	191
_	一 明治初期の日仏関係	192
	(1) 明治政府による在外公館の設置――日本の近代化―	192
	(2) フランス外務省の対日政策の消極性――普仏戦争に	戦争による内政の混乱―― 196
	(3) フランスにおける日本文化への関心の広がり 201	
$\vec{=}$	一 フランスの産業芸術と「ジャポニスム」の誕生	207
	(1) 「ジャポニスム」のはじまり 208	
	(2)「ジャポニスム」における日本工芸品の探求 20	
三	三 一八七八年パリ万国博覧会の開催と日本の参加	216

=				_	は	第四章	お				五.				四		
「日本」	3	$\widehat{\underline{2}}$	$\widehat{\underline{1}}$	博覧	はじめに		わりに	3	$\widehat{\underline{2}}$	$\widehat{\underline{1}}$	日本	3	$\widehat{\underline{2}}$	$\widehat{\underline{1}}$	日本	$\widehat{\underline{2}}$	$\widehat{1}$
坐」の展示に対するフランスの反応	前田正名によるメディア戦略――日本文化の伝達―― 281	日本の展示 274	博覧会場の全体像 268	博覧会場における「日本」	267	博覧会場における「ジャポニスム」の広がり [※]	247	高等委員会――日本の古美術への期待―― 24	出品者および出品物の特徴 24	日本の出品物の収集 239	日本における出品物の収集とその内容 23	日本博覧会事務局の創設 236	前田正名の登場 231	難航する日本博覧会事務局の設置 227	日本博覧会事務局の創設と前田正名の活躍 27	日本の参加経緯 221	第三共和政における万国博覧会開催の決定 216

330

325

てきた。こうした研究を通じて、ジャポニスムは主に美術用語として定着してきたといってよいだろう。 東欧や北欧を含めた欧米諸国における調査が行われ、広範囲の国・地域にわたるジャポニスムの影響が実証され ランスと日本の共同企画による「ジャポニスム展」がパリと東京において開催された。またフランス以外にも、 ムの研究対象は、絵画だけでなく、版画、彫刻、工芸などに広がった。その研究成果として一九八八年には、フ 派の美術に、日本の「浮世絵が与えた影響を分析しようという限定されたもの」であった。その後、ジャポニス におけるジャポニスム」が開催されたことを出発点としている。当初の関心はとりわけ一九世紀フランスの印

化現象として捉えること」が重視され、建築、音楽、写真、モード(服飾)も含めた幅広いジャポニスム研究が 学会が編纂した『ジャポニスム入門』においても、ジャポニスムを「単なる美術運動としてだけでなく、広い文 用品までを含む)がどのような役割を果たしたのか、という考察」が必要であるとしている。またジャポニスム 馬渕明子は、「ジャポニスムを芸術の運動という枠を超えて、社会、経済のレベルで、日本の商品(美術品から日 しかし一方で、ジャポニスムを美術分野に限定されないより広い文脈で捉えることの必要性が指摘されてきた。

それが一日本」イメージの形成と変容にどのようにかかわっているかという問題に焦点を当てたい として理解した上で、その流行の背景となった当時のフランスにおける政治・社会・産業・文化の状況に注目し、 本書もまたこうした近年の研究動向を前提に、ジャポニスムを美術分野に限定するのではなく、広い文化現象

取りあげられている。

2) 分析方法――先行研究との関連で―

そのために本書がとるアプローチは具体的には次のものである。第一に、一八六七年と一八七八年のパリ万国

されたパリ万国博関連の書籍や新聞・雑誌などの分析を行う。分析のもととなる史料については、各部冒頭にま らかにするために、日仏間の外交文書、文書館等に所蔵される万国博史料、また一九世紀後半に日仏両国で出版 ら分析していく。とりわけ、日本側の参加意図、出品物、 パリ万国博への参加、 のような意図で万国博の開催を決定し、どのように諸外国を博覧会場に位置づけたのか。一方、 博における日本参加について、開催国フランスと参加国日本の双方の観点から分析する。 いに対して、本書は、 出品物の展示を通してどのような「日本」を諸外国に発信しようと試みたのか。こうした 開催国フランスと参加国日本の意図や動向を調べ、一方向的ではなく双方向的な観点か 展示内容と、フランス側の行動や反応の交錯関係を明 開催国のフランスがど 参加国の日本は

あった。本書は、それだけにとどまらず、両万国博で注目すべき役割を果たした人物や、さらにはそうした人物 得して最高の評価を受け、「ジャポニスム」という言葉が生まれるもととなったのは日本工芸品 のネットワークにも注目していきたい。 第二に、本書はとくに「物」と「人」に注目する。一八六七年と一八七八年の両パリ万国博でグランプリを獲 (特に陶磁器)で

とめたのでそれを参照されたい。

以上の点に関して、とりわけ先行研究との関係でもう少し詳しく述べていこう。

◆「開催国」/「参加国」の図式から双方向的なイメージの形成へ

位置づけているように、これまでの研究では主として一九世紀後半から二〇世紀前半の万国博を対象に、 がその共著の冒頭において、万国博を「一九世紀後半の社会を全体として再現することのできる稀有な方法_ 万国博覧会を対象とした研究が本格化したのは、一九七〇年代末である。リンダ・エモーヌとカルロ・オルモ

思想など、さまざまな研究分野からの分析が行われてきた。そしてその研究関心について(ミヌ)

序 章

産業革命以降の国家間の技術競争の場、

開催国による帝国主義的世界観の提示、植民地表象、都市における

るとおり、万国博の主要な開催国であったフランス、イギリス、アメリカが分析対象とされてきたために、 消費文化の拡大、大衆娯楽としての側面など多様である。その多くに共通する点としては、これまでに指摘され

催国」の視点や論理が強調されてきたことであろう。

フランスでは、結局中止になったものの、一八八九年パリ万国博の一○○周年およびフランス革命二○○周年

ランスでは万国博関係の史料を所蔵する機関が、建築や写真などまさに「展示」されるものに注目した展覧会を 七年)、フランス国立文書館では「写真と万国博」展(二〇〇〇年)といった展覧会が開催された。このようにフ も高まり、装飾美術協会による「万国博」展(一九八三年)を出発点に、オルセー美術館では「一八八九年 を記念した「一九八九年」パリ万国博の開催計画が、万国博研究を進展させる契機となった。芸術分野での関心 エッフェル塔と万国博――」展(一九八九年)、「パリ万国博――現実あるいはユートピアの建築――」展(二〇〇

開催し、万国博研究の主導的な役割を果たしてきたこともひとつの特徴である。 治文化史の研究として『パリ万国博』、そして『一八八九年万国博』、さらに一八八九年のパリ万国博を、一七八 歴史学からのパリ万国博の研究としては、パスカル・オリが第一人者としてあげられる。オリは、 万国博の政

ティ構築の過程を明らかにした。日本では、木下賢一が第二帝政期のパリ万国博と労働者委員会について論じて 力の間で繰り広げられた「記憶」をめぐる闘いのなかに位置づけ、第三共和政によるナショナル・アイデンティ 三つの祭典の比較という見地から論ずる『記憶のための国民』を著した。またオリは、ピエール・ノラの 九年のフランス革命の一○○周年と位置づけ、これと一九三九年の一五○年祭、一九八九年の二○○年祭という の場』においても論文を発表し、革命一〇〇年祭(一八八九年パリ万国博)を、一八七〇年代以降の左右の政治勢 サン=シモン主義のユートピアとして初期のパリ万国博を明らかにした。

他方、エドワード

・サイードの『オリエンタリズム』の影響を受けて、

博覧会場においてヨーロ

ッ

洋による東洋の植民地支配を正当化し、そうしたイデオロギーを再生産する装置として捉えるという枠組みであ のような役割を果たしたかを問題にする研究も多く見られる。こうした研究に共通しているのは、 (extra-européen) がどのように表現されたか、 とりわけ他者 (植民地人) の表象、 植民地文化が万国 万国博を、 いてど

た「ヨーロッパ外部」 二〇一〇年に「エキゾティックな博覧会――万国博とヨーロッパ外部の文化、フランス一八五五年~一九三七年 示全体としては開催国であるフランスの視点から捉えた「外部」にとどまっている。このように万国博に参加し ったオリエンタリズムの議論に陥りかねない。 ――」展とシンポジウムが開催された。この展示にしても、 しかしながら、このような見地は、 こうした図式は、 の動向に関する研究は進展してきているものの、ともすれば開催国側からの視点の強調と 現在の万国博研究においても踏襲されているように思われる。フランス国立文書館では 西洋の視点と植民地の視線の二項対立的な図式にとどまる場合もある。 ヨーロッパとヨーロッパ外部に分けて論じられ、

ジが形成されていったのである。 伝達されるわけではない。 で形成された「日本」イメージと、その形成過程である。 的ではない開催国と参加国の関係であり、さらに博覧会場に集う観衆を含めて、 んだ観衆によって、 メージを発信する場となったが、このように発信されたイメージは必ずしも参加国の意図したとおりに諸外国に これに対して、 本書がパリ万国博の日本参加を通じて注目していきたいのは、 さまざまなかたちで批判と賞讃の対象となり、 開催国の政府をはじめ、 万国博を組織する委員会、 万国博覧会は、 多様な要因が複雑に絡み合いながら、 出品物の展示を通じて参加国が自己イ 批評家、 三者の複合的な相互作用 万国博という場における一方向 さらに博覧会場に足を運 のなか

及されるだけで、その意義が十分に論じられることはなかったといってよい。 加とは切り離され、幕末における外交問題のひとつとして扱われてきた観がある。初めての万国博参加として言 徳川昭武一行のパリ万国博参加をめぐる動向が外交史の研究として注目されてきたものの、 本の「近代化」との関連で検証するものが多かった。こうしたなかで、一八六七年パリ万国博への日本参加は .博研究は、主として「明治以降」の万国博参加および内国博覧会を対象として取りあげ、 日本における万国博研究については、伊藤真実子がその動向を詳細にまとめている。「日本」を題材とした万日本における万国博研究については、伊藤真実子がその動向を詳細にまとめている。「日本」を題材とした万 とりわけこれらを日 明治以降の万国博参

のために、本書は、これら二つの万国博への日本の参加をめぐる両国の史料を比較分析し、 スム」の絶頂期を迎えるのであり、この意味において両万国博は同一線上で捉えなければならないのである。 八七〇年のフランスにおいて日本文化への関心を引き起こし、そして一八七八年パリ万国博において「ジャポニ 央集権制へ、一方フランスにおいては第二帝政から第三共和政へと、両国の政治体制の変革期に相当する。こう た事柄に加え、次のような理由がある。ひとつには、この時期は、日本においては江戸の幕藩体制から明治 メージの構築という観点からは、先述のように、まさに、一八六七年パリ万国博は大きな契機となり、これが一 したなかで、日本側の参加形態や参加意図などは注目すべき変化を見せる。また本書の主題である「日本」のイ これに対し、本書が一八六七年と一八七八年のパリ万国博を分析対象として扱うことには、これまで述べてき 両国における多様な 中

ピールや殖産興業の場と位置づける日本、そして日本の出品物に感嘆しジャポニスムの流行を見せることとなっ 万国博を通じ自らの産業の発展をはかるフランス、近代化に突入するなか万国博を自らの国家イメージのア 以上のような観点から、フランスにおける「日本」の受容の経緯を、一方向的なものとしてではな

のか、文化像の形成の契機として万国博を捉えることを目指す。 たフランス社会、こうした三者のさまざまな関わりのなかで、どのような「日本」イメージが形成されていった

近年日本で刊行された『万国博覧会と人間の歴史』では、万国博をめぐる開催国と参加国 の多様な関係に焦点

が当てられ、万国博の分析を通じたよりグローバルな人間社会・歴史の解明を目的としているが、本書もその視

「物」と「人」

点を共有するものである。

加を取りあげ、第Ⅱ部では、その後の一八七○年代の日仏交流および一八七八年パリ万国博への日本参加を論じ 以上のような関心に基づきつつ、本書は、二部構成をとる。第1部では、一八六七年パリ万国博への É 1本の参

る。その際、とりわけ本書が留意するのは、「物」と「人」という二つの軸である。

展示されたのか、そしてそれがいかなる反応を引き起こしたのかを具体的に見ていく。 品物を直接見ることによって、その国の文化イメージを形成していったのである。したがって、本書は各章にお いて、二つのパリ万国博で、具体的にどのような「物」が、どのような意図で出品され、またどのような仕方で 第一に、万国博とはまさに「物」を展示する場であった。万国博の会場に集う観衆は、参加各国が展示した出

在であったと同時に、 会場に展示される「物」と同様に、万国博を契機にヨーロッパに渡った「日本人」も好奇の対象であり、「日本_ のイメージを形成する重要な役割を担っていた。だが、そればかりではない、本書は、「日本人」が見られる存 だが、第二に、本書は、万国博における「物」とならんで「人」という契機も重視したい。この時代には博覧 能動的な存在であった点に着目したい。

八六七年パリ万国博に将軍名代として参加した徳川昭武は、 フランスの新聞に図版入りで掲載され、

序 章 「見られる日本人」となったが、この万国博参加を契機として、 日本の軍事・法学の近代化に大きな役割を果た

人的ネットワークを繋げる役割を果たし

日仏間の情報交換、

したフランス人との交際を生涯にわたって継続し、

る役割を担った。これらの日本人は、幕末から明治にかけて、先端技術の摂取や近代国家の構築に励み、 (一八四四~一八九八)、事務局長の前田正名などの日本人が万国博を通じて積極的に日本の情報をフランスに伝え また一八七八年パリ万国博では、初代駐仏公使を務めた鮫島尚信(一八四五~一八八〇)、代理公使の

スの人々との交際を通じて互いに情報交換を行い、当時の日本の情報を伝えるなど、フランスにおける「日本」

像の形成に積極的な役割を果たしていったのである。

ていた薩摩藩使節と行動をともにし、「日本」の主権をアピールしようとする幕府の意図をくじくモンブラン したアレクサンダー・フォン・シーボルト(Alexander George Gustav von Siebold, 1846-1911)、パリにすでに到着し パリ万国博の参加は、そうした人物なしには実現しなかったといえよう。日本からパリに向かう幕府使節に同行 他方、「日本」の参加やその文化受容においては、日本人以外の人物も多く関わっている。とりわけ六七年の

べきは、ギシャールやシェノーなど、フランス工芸産業の指導者や批評家の視線だろう。六七年万国博で発見さ がどのような意味を有していたのかが立体的に明らかになるのである。七八年万国博については、ここで参照す 人レオポルド・ヴィレット(Léopold Villette. 1822-1907)、彼らの視線を通じてこそ、パリ万国博への日本の参加 (Comte de Montblanc, Baron d'Ingelmunster, 1833-1894)、そうした行動を見つめフランス政府に報告するフランス軍 た「日本」についての彼らの活発な言説こそ、「ジャポニスム」を生み出すにいたったからである

と「人」の交流を大きく促す重大な契機となった。フランスにおけるジャポニスムの誕生・興隆の背景となった 八六七年パリ万国博と一八七八年パリ万国博の舞台で、日本から出品された「物」、そして万国博に携わった 以上のように、 海外渡航が一般にはまだ非常に限られていた時代に、万国博は、フランスと日本の間に 物

示すことが本書の最終目標である。

- (¬) G. Flaubert, C. Gothot-Mersch éd., Bouvard et Pécuchet: avec un choix des scénarios, du Sottisier, L'album de la は、一八八○年のフローベールの急逝により未定稿のまま残されたが、一九一○年にコナール全集版『ブヴァールとペ を代表する作家であり、主著には『ボヴァリー夫人』(一八五七年)、『感情教育』(一八六九年)がある。『紋切型辞典 marquise et Le dictionnaire des idées reçues, Collection Folio, 1137, Paris, Gallimard, 1979, p. 515 (日本語訳は、フロー これを本文で引用した(詳細は、小倉孝誠「解説」、フローベール著、前掲書、二七三~三一六頁を参照 ひろく受容された意見や考えを反映した言葉が収録されている。このなかに「博覧会(Exposition)」の項目があり キュシェ』の巻で初めて出版された。著者が『紋切型辞典』を執筆したのは一八七〇年代とされ、同時代にフランスで ベール著、小倉孝誠訳『紋切型辞典』岩波書店、二〇〇〇年、一九五頁を参照)。フローベールは、一九世紀フランス
- 覧会事務局(Bureau International des Expositions, 以下略してBIE)公式サイト(http://www.bie-paris.org/site/)。 最終閲覧日:二〇一七年二月七日 A. Rasmussen, Les Fastes du Progrès, le guide des expositions universelles, 1851-1992. Paris, Flammarion, 1992; 国際輯 各万国博に関する統計データ(開催国、参加国、会期、会場、入場者数等)は以下を参照。B. Schroeder-Gudehus et
- 3 産業美術国際博(Exposition internationale des Arts décoratifs et industriels Modernes)、一九三一年国際植民地博 (Exposition coloniale internationale) である° 各博覧会の正式名称は、一八八一年国際電気博 (Exposition internationale d'Electricité)、一九二五年現代装飾美術
- 4 ○年上海(七、三○○万人)である。Cf. B. Schroeder-Gudehus et A. Rasmussen, *oþ. cit*.; 国際博覧会事務局(BIE 七○年大阪は入場者数の九七%が日本人である。なお、二○一七年までに最高の入場者数を記録した万国博は、二○一 一九〇〇年パリ万国博の入場者数を初めて上回ったのは、一九七〇年大阪(六、四二二万人)であった。ただし一九

序 章

公式サイト。

八年の国有化にともない、現在のフランス国鉄(Société Nationale des Chemins de fer Français, SNCF)に統合された。 地中海鉄道(Compagnie des chemins de fer de Paris à Lyon et à la Méditerranée, PLM)であった。この鉄道は、一九三 八年である。この地中海に面したマルセイユと首都パリを結んだのは、一八五七年に開業した「パリ・リヨン・ たマルセイユの港町は、アフリカおよび東洋諸国への玄関口であった。サン・シャルル駅が開業したのは一八四 がるのは、 フランスの南部、 白いマストと、 マルセイユの中心にあるサン・シャルル駅を降り、港に向かって歩くと、次第に目の前に広 青い地中海である。ナポレオン三世の統治下、フランスの第二帝政期に大きく発展し

の交流は された出 本人は、約一カ月半の航海等を経てマルセイユ港に着き、その後リヨンを経由して、パリに到着した。船に積載 によって首都パリと結ばれた時代に、日本の参加が実現した。パリ万国博に参列するためにフランスを訪れた日 七年パリ万国博は「完全にユニヴェルセル(universelle)であること」を目指し、ヨーロッパ諸国のみならず、 『最も遠く離れた国々」の参加を求めた。フランスにおいて、まさに東洋への玄関口であるマルセイユが、鉄道 かかわっている。とりわけパリ万国博は両国および諸外国との外交・産業・文化の交流を促進する重要な場と リ万国博の開催は、こうした地中海に開かれた鉄道網の発展と不可分であった。本書で見たように、一八六 品物も、 この時代の技術の発展、 ほぼ同じ経路をたどっている。一九世紀後半、フランスと日本の初期における「人」と「物」 世界的に広がった貿易の自由化の流れ、 未知なる文化への関心の増大と密接

なった。

その後の研究成果を加え、

加筆・修正を行ったものである。 本書の基盤には「日本人とは何か、 日本文化とは何か」という問題意識がある。これは筆者が幼少期に過ごし

「日本」――初期日仏交流史における「日本」イメージの形成

しいに、

国博覧会における

相互作用を通じたナショナル・アイデンティティおよび文化イメージの形成である。本書の出発点はジャポニス き、その社会的背景に光をあてた。パリ万国博を舞台に検討を試みたのは、 になった。とりわけ日本の開国後、フランスを中心にヨーロッパやアメリカで広がったジャポニスムに関心を抱 よび大学院で歴史学について学ぶなかで、私はこの問いをヨーロッパという外部から探究してみたいと思うよう かで、それまで問うことすらなかった「日本」とは何かという問題意識が生まれたように思う。その後、大学お た外国での経験にかかわる。二年をフランス(パリ)、約三年半をアメリカ(ヴァージニア州)で過ごした。とく 多感な時期を過ごしたアメリカでは、さまざまな国籍の人々、特に東アジア諸国のクラスメートと出会うな 開催国、 参加国、観衆という三者の

このときに痛感したことは、人間の残した記録は、まるで大海のように無限に広がっているということであった。 二〇〇六年の秋から約二年半、パリに留学した。留学中は、フランス国立文書館や外務省文書館に通い続けた。

ムの社会史という関心にあるということもできるであろう。

滞在したホテル、 たシャン・ド・マルスはもちろん、 や息づかいが感じられてくるようになった。研究を進めていくなかで、フランス人や日本人のご子孫と出会った。 その大海のなかから、一九世紀を生きた人々が残した書き物をめくっていくうちに、次第にひとりひとりの思い かつて一九世紀に本書の登場人物たちがフランスで訪れた各所をまわった。パリ万国博の会場となっ アパルトマン、 通った学校、 万国博を組織した帝国委員会および高等委員会の事務局、 散歩した公園、 墓地など。パリのペール・ラシェーズ墓地には 日本領事館の跡地

八六七年パリ万国博に参加するために渡仏した佐賀藩の商人の野中元右衛門、

モンパルナス墓地には初代駐仏

公使の鮫島尚信が今も眠っている。

の通った、人間の生き様そのものに迫ることであることを痛感している。 このように研究を通じた出会いを重ねていくうちに、歴史研究とは、単なる平面的な記録の検証ではなく、

てくださった先達の方々にあらためて敬意を表したい。フランスと日本の同僚・友人たちにも深く感謝を申し上 申し上げたい。そして、名前をあげることはできないが、本研究を進めていく際に道標となり多くの知見を与え とりわけパリ第一大学・一九世紀史研究所所長のドミニク・カリファ先生、一橋大学の森村敏己先生、 実際、この研究も、フランスと日本の多くの方々のご教示とご協力なしには成し遂げることができなかった。 杏林大学の楠家重敏先生、松戸市戸定歴史館の齊藤洋一館長、渋沢史料館の関根仁氏には、心より感謝を 上智大学の長谷川輝夫先生、武蔵大学の小山ブリジット先生、跡見学園女子大学の山田徹雄先生、三谷博

えた多領域の研究がこれからの万国博の研究発展には不可欠であり、その試みは端緒に着いたばかりである。 韓国との学術交流も広がっている。今後の万国博覧会は、開催国あるいは参加国の一方向的な研究ではなく、開 た国際シンポジウムに参加する機会を得たが、このように研究のネットワークは、現在日本だけでなく、 から、研究世界が大きく広がり、多くの知的刺激をいただいた。二〇一六年一一月にはソウル国立大学で開かれ 究代表者の佐野真由子先生をはじめ、多様な領域の研究者、博覧会の組織・運営に携わる実務家の方々との議論 また二○一三年より参加している国際日本文化研究センターの共同研究「万国博覧会と人間の歴史」では、研 の相互の関係、また参加国と参加国の関係を前提としなければならないだろう。こうした一国を超 中国

本書の内容は以下の科学研究費の助成を受けて実施した研究成果をもとにしている。二〇一二~二〇一

(研究活動スタート支援)「一九世紀パリ万博における日本―

あとがき

三年度 JSPS 科研費 JP24820018

ーナショナル・アイ

344

にパリ万国博が果たした役割についての実証的研究――万国博組織委員会を中心に――」。

さらに、本書刊行に際しては、跡見学園女子大学学術図書出版助成を受けた。深く謝意を申し上げる。また文

許可してくださったフランス国立文書館、外務省文書館、国立図書館、一橋大学附属図書館、松戸市戸定歴史館 献調査に際しては、フランスと日本の多くの方々、文書館や図書館にお世話になった。とりわけ、資料の掲載を

ならびに個人所蔵家の方々に御礼を申し上げたい。

してきた思文閣出版の田中峰人氏が編集をご担当くださった。田中氏の的確な助言や励ましなしには本書は完成 また、本書は、共同研究「万国博覧会と人間の歴史」での研究会やシンポジウムなど、さまざまな時間を共有

しなかった。深く感謝を申し上げます。

日本の多くの方々に支えられ、本書を刊行できることを幸せに思う。 二〇一七年は、一八六七年パリ万国博と日本の初参加から一五〇周年にあたる。この記念の年に、フランスと

最後に、いつも明るく勇気づけ支えてくれる両親と夫に、心から感謝の気持ちを贈りたい。

二〇一七年一月

寺本敬子

モンプラン (Montblanc, C.) ・・・・・・・・ 20,107, 122,125,132 ,163,164,184,192-196,232,327,336
ъ
- 第4章
山高信離
\$
吉田六左衛門64
న
ル・プレ (Le Play, P.)
ルソー(Rousseau, F.)
ħ
レアル・デ・ベリエール (Réal des Perrières, A.) 152 レイトン (Leighton, F.) 49 レオポルドー世 (Leopold I) 124,135 レガメ (Régamey, F.) 205,278 レセップス (de Lesseps, J.) 137,141,142,146,147
3
ロッシュ (Roches, L.)
ロニ(de Rosny, L.)・・・・・・・132,136,195,206,336

フルーリ=エラール (Fleury-Hérald, P.) $\cdot\cdot$ 59,60,62,141,143–148,151,154,157,159,193,221 ブルデ (Bourdais, J.) $\cdot\cdot$ 219,271 ブロイ (de Broglie, A.) $\cdot\cdot$ 220 フローベール (Flaubert, G.) $\cdot\cdot$ 3,46,184
~¹J − (Perry, M.) ····9
ベルクール→デュシェーヌ・ド・ベルクール
ベルジェ (Berger, P.)
ベルトー(Berthaut, H.)
ほ
保科俊太郎
ポワソナード・ド・フォンタラビー(Boissonade de Fontarabie, G.)200,336
*
<u>. </u>
前島密····································
マク=マオン(de MacMahon, P.) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
松方正義
マルクリ (Marquerie, C.)
$\boldsymbol{\mathcal{A}}$
水野忠精
箕作麟祥····································
箕田長次郎
字川香山····································
民部大輔→徳川昭武
む
向山一履······111,112,116,117, 118 ,147,149,150,153,155,157-162,164 ムスティエ(de Moustier, L.)······109,121,139,144,149,156,159,163,196
109,121,139,144,149,130,139,103,190
Ø
メッケル (Meckel, K.)
メリメ (Mérimée, P.) · · · · · · · 54-56,81
メルメ・カション (Mermet Cachon, E.)118–122, 125, 152–155, 159, 164
ŧ
モージュ (de Moges, A.)・・・・・・・10,202
モーノエ (de Moges, A.) 10,202 モネ (Monet, C.) 336
- 「 (Monet, C.) 330

中野健明·····	
鍋島直正	
ナポレオン一世(Napoléon I) · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
ナポレオン三世(Napoléon III) · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
4,36,45,46,51,52,55,84,1 ナポレオン公(Prince Napoléon) ····································	09,110,120,121,147,155,160-164,193,194
Ç	
新見正興	
ニール (Niel, A.)	
新納刑部	136-138
Ø	
野中元右衛門	65
は	
パークス (Parkes, H.) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
ハート (Hart, R.)	
パジェス (Pagès, L.)	
バスティアン (Bastien, E.)	199
支倉常長	48
ハモンド (Hammond, E.) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
林 志正	330,337
Ŭ.	
ビュルティ(Burty, P.)	
平山成信	
ビング (Bing, S.) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	278,295
సే	
ファルギエール (Falguière, J.)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	273
ブーシェ・ド・ペルテ (Boucher de Perthes, J.) …	
フォンペルテュイ (Fontpertuis, A.)	
深川長右衛門	
福地源一郎	
藤山文一	
ブスケ (Bousquet, G.) ······	
ブラックモン(Bracquemond, F.) ···································	
フランソワ・ド・ヌシャトー(Fransois de Neufc	hâteau, N.)39,40
ブリュナ(Brunat, P.)	76,198,199

シュヌヴィエール (Chennevières-Pointel, C.) ···································	219
वं	
杉浦譲	82,116
スタンレー(Stanley, E.)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	114
世	
セルヌッシ(Cernuschi, H.)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	204 205
セルメック(Cernuscni, H.)	204,205
7	
ソロン (Solon, M.) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	215,310
た	
大君58,61,71,80,114,116,119,128-131,14	4 147-150 152 153 155 156 283
00,01,71,00,111,110,110,110	→徳川慶喜も見よ
ダヴィウ(Davioud, G.) ···································	
ダヴェーズ (d'Avèze) ····································	
高橋由一	
竹内忠兵衛	
竹内保徳	
田中不二麿	
田辺太一116,117,12	1,133,143,146-148,153,223,335
7	
ディエ=モナン(Dietz-Monnin, C.) ······	
ティスラン(Tisserand, E.) ···································	
テスラン・ド・ボール (Teisseranc de Bort, P.) ······	
デュシェーヌ・ド・ベルクール (Duchesne de Bellecourt, C	
デュブシェ(Dubouché, A.) ···································	
デュリー(Dury, L.)	
デュレ(Duret, T.) 寺島宗則	
守島示則	222-225,228,229
ک	
トゥレ(Tourret, C.)	
徳川慶喜······11,59,104,105,11	
徳川慶篤······· 徳川昭武(民部大輔、公子)·······11,18,19,31,5	
121,139,154,164,165,184,200,222,237,326,327,335,	336
徳川斉昭	110
トキント・ド・ローデンベーク (T'Kint de Roodenbeck, A.) · · · · · · 135
ドルアン・ド・リュイ (Drouyn de Lhuys, E.)	57

ギシャール (Guichard, E.)	20,57,211-215,248,327,328
	205,278
	<
	·
	238,286
	286
クランツ (Krantz, J.)217,21	9,228,229,235,238,245,246,271,275,276,279,280
	59,118,160,161
グロ(Gros, J.) ·······	
	2
小出千之助	65,88
公子→徳川昭武	
	61
	43
	133,136-138,193
ゴンクール、E(de Goncourt, E.)	11,82,215,294,296,299,337
	č
西郷隆盛	152
斎藤健次郎	
佐野常民	
鮫島尚信20,13	6,192,194-196,206,207,222,223,225,226,232,238
	224,225,228
サン=カンタン→ウーヴレ・ド・サン=	カンタン
	L
シーボルト、A (von Siebold, A.)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	20,105,106,108,109,111,114-117,118,133,134,
153, 154, 156, 158-160, 162-164, 184,	
シーボルト、P(von Siebold, P.) ···········	106,133,134
シェノー(Chesneau, E.) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
	3,214,216,248,288,298-303,308,311-313,328,329
柴田剛中	59,60,112,134-136,138,141-143
	11,82,111,116,335,337
	220
	199
シュヴァリエ(Chevalier, M.) ···································	

人名索引

*採録語句が節・項のタイトルに含まれる場合は該当頁をゴシック表記にし、 その節・項内からは採録を省略した。

あ

δ
アルバート公(Prince Albert)
アルファン(Alphand, J.)
アンベール (Humbert, A.)
L)
•
井伊直弼127
池田長発132-134
井上馨234
今村和郎207
岩倉具視
岩下方平139,143,152,335
ð
ヴァイデンバッハ(Weidenbach, C.) ・・・・・・・・158,164
ヴィアル (Vial, E.) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
ヴィクトリア女王(Victoria, A.) ···································
ヴィレット (Villette, L.)20,107,109,121,154,155,156,163–165,184,336
ヴェルニ(Verny, F.) · · · · · · · 198,199,201
ウーヴレ・ド・サン = カンタン (Ouvré de Saint-Quentin, A.) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
₽.
大久保利通
大隈重信
オールコック (Alcock, R.) ・・・・・・・・・5,49,50,135
小栗忠順
オスマン(Haussmann, G.) ···········4
n
カション→メルメ・カション
勝海舟・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・119
カミュ (Camus, H.)
河原徳立